

アスペクトの恒常性と脆さ  
——ウイトゲンシュタインとハイデガー——<sup>(1)</sup>

荒 畑 靖 宏

## 1. はじめに

L・ウィトゲンシュタインが書いたもので、その動機、意義、目的などが完全に明確であるものなど皆無であると言えればそれまでである。周知のようにそれはすでに、彼自身が納得したかたちで出版できた最初で最後の哲学書である『論理哲学論考』(Tractatus logico-philosophicus: T)が何の本なのかということに関してすら始まっていて、それは21世紀に入った現在でもウィトゲンシュタイン研究における中心的論争であり続けている<sup>(2)</sup>。それでも、『哲学探究』(Philosophische Untersuchungen: PU)第二部のおよそ六割をも占める第xi章は、群をぬいて謎めいていると思われる。そのことは、現在の「『論考』戦争」と比較すれば明らかである。『論考』が何の書なのかという問題をめぐっては、論理や倫理について語りえないものを示すための書とみなす、P・M・S・ハッカーを中心とする伝統的解釈と、そこに書かれていることが最初から最後まで純然たるナンセンスであることを理解できる読者を作りあげるための書だとみなす、C・ダイヤモンド、J・コナント、M・クレマーらを中心とするThe New Wittgensteinians(正確には「決然たる読み手たち(resolute readers)」<sup>(3)</sup>)という二大陣営のあいだの活発な論争を中心としている。これに対して、『探究』第二部第xi章の、とくに「アスペクト論」をめぐる議論は、たしかに近年関連文献が続々と発表されているが<sup>(4)</sup>、はっきり言っていまだ地方豪族の小競り合いのレベルを出ていない。(当然ながらその中でもS・カヴェルの影響力は傑出してはいるが、いかんせんアスペクトや「語の相貌」についての彼の発言は断片的で、彼の議論の脈絡も他のものと共約不可能なほど独特で、ウィトゲンシュタインのアスペクト論を研究する者の大半が彼のご託宣に振り回されているという印象を受け

る。)

もちろんそれには、まがりなりにも完成した書物である『論考』と、そもそも『探究』の一部であることすら疑われている断片<sup>(5)</sup>である『探究』第二部との違いも原因となっていよう。しかし本稿はこうしたテキスト・クリティークの問題は無視する。結果として第二部全体が、皮肉なことに、多重アスペクト像のようにああも見えればこうも見えるものになってしまっているのはたしかである。それを承知のうえでわたし自身は、第二部第 xi 章のアスペクト論がもつひとつの重要な(わたしは「中心的な」と言いたいのだが)アスペクトとして、それがウイトゲンシュタインの哲学的方法のアレゴリーレグリーになっていると主張したい<sup>(6)</sup>。しかもその「方法」は、彼の哲学 (sein Philosophieren) が最初から最後まで貫いたものとして考えられている。『論考』が、おのれの諸命題を梯子として登りきり、それらをナンセンスとして投げ捨てたあとに読者がどうなると主張して終わっているかを思い起こしてほしい。「そのときひとは世界を正しく見る」(T 6.54) と言われているのである。

本稿は、ウイトゲンシュタインの「方法」を明確化するといういまだわたしにも完全には展望できていないプロジェクトの一貫である、「ウイトゲンシュタインのアスペクト論を彼自身の哲学的方法のアレゴリーとして読み解く」という試みの、そのまた序論の概説でしかない。ここでわたしが取り上げるのは、アスペクトにまつわる諸々の体験がわれわれの生においてどのような意味をもち、それについて論じることによってどんな哲学的眼目があると彼が考えていたかをめぐり、ある小さな論争である。意外なことに、その論争にはハイデガーが登場する。わたしは、ウイトゲンシュタインの「方法」の明確化は、同時平行的に初期ハイデガーの「方法」——「形式的告示 (formale

Anzeige)」と呼ばれるもの——を明確化することによって促進されると考えている。しかも、まさにわたしの「方法のアレゴリー」解釈の一部に『存在と時間』<sup>(7)</sup>の議論を組み込めると考えている。しかしわたしには、一部の解釈者が問題の局地戦にハイデガーを投入するその仕方には問題があると思われるのである。その局地戦の口火を切ったのは、『探究』第二部第 xi 章の哲学的眼目についての S・マルハルの解釈 (Mulhall (1990), (2001)) である。

## 2. マルハルのアスペクト論解釈

マルハルの解釈は、ウィトゲンシュタインのアスペクト論についての他の多くの文献と同じように、第 xi 章をまずは知覚の心理学として読みつつも、その成果を意味の理論に応用するというスタイルをとっている。彼はたとえば、アスペクト知覚についてのウィトゲンシュタインの議論に基づいて、デイヴィドソンの解釈主義的な意味の理論を「所与の神話」の言語理論版として批判している (cf. Mulhall (1990), 104–125)。しかし彼の議論が他の研究と一線を画するのは、ハイデガーの世界内存在の分析と接続することによって、人間が世界のうちに生きるとはいかなることかについての形而上学へと発展させられている点である。以下、本稿での議論に関連するかぎりでのマルハルの重要な論点を、ウィトゲンシュタイン自身の言葉で裏づけながら見ていくことにしよう。

### 2.-1. アスペクトの閃きのパラドクスとその解消戦略

ウィトゲンシュタインは PU-II, 113 でこう言っている。「わたしはある顔を観察していて、突然、その顔がある他の顔と似ていることに気づく。わた

しは、その顔が変わったわけではないのを見て分かっているが、にもかかわらずそれを違うふうに見ているのである。こういった経験をわたしは「アスペクトの気づき〔das Bemerkens eines Aspekts〕」と呼ぶことにする。マルハルの見るところでは、このようにしてウイトゲンシュタインは、あるアスペクトが突然閃くという現象をパラドキシカルなものとして提示することから第 xi 章を始めている。わたしは目の前の顔それ自体が変わったわけではないのを知っている。しかも——ウイトゲンシュタイン自身がイタリック体で強調しているとおりに——それをわたしは見て分かっている (Ich sehe) のである。にもかかわらずわたしはあきらかに今そこに、さきほどまでは影もかたちもなかったものを見ている。こうして「ひとは「なにかが変化したのになにも変化していない」と言いたくなる。」(BPP-I, 966)

ウイトゲンシュタインのこうした逆説的な提示の仕方から、ひとは『探究』第一部の規則順守論と類比的な戦略的意図を読み取るかもしれない。というのは、われわれの日常的な規則順守の実践がパラドキシカルに見えるのは、もっと正確に言うと、規則が行為の仕方を決定できるはずがないと思ってしまうのは、「解釈説」という通路からその実践に近づく者——規則の把握とは規則の表現を正しく解釈する (deuten) ことであると前提している者——にとってだけである (cf. PU-I, 198, 201-3) のと同じように、「なにも変わっていないはずなのにすべてが変わってしまった」と表現したくなるこのアスペクトの閃きの体験が、どこか謎めいて見え、ゆえに通常の知覚についてのものとは別種の説明を要求しているように思われるのは、おそらく、暗黙のうちにあスペクト視一般を内的解釈 (推論) モデルに基づいて理解している者にとってだけだからである。

たしかに第 xi 章には、ウイトゲンシュタインがあスペクト視の内的過程

モデルを、手を変え品を変え攻撃しようとしたその痕跡がふんだんに見いだされる。ウイトゲンシュタインはしばしば、哲学的説明においてよく見られる、「それ自体を回すことはできても、他のものがそれと連動することのないような歯車」(PU-I, 271)、いわば「遊び車」を批判するが、次の文章などは、アスペクトの閃きを内的視覚印象の「構制 (Organisation)」の変化として説明しようとすることに対する同種の批判として読むことができる。

わたしに突然、ある判じ絵の答えが見える。以前は枝があったところに、いまは人間の姿がある。わたしの視覚印象が変化したのであり、そうしてわたしはいま、その感覚印象がただ色とかたちをもっていただけでなく、あるまったく特定の「構制」をもそなえていたことを認識する。——わたしの視覚印象が変化したのである。——では、かつてそれはどうだったのであり、そしていまはどうなっているのだ？——もしわたしがその視覚印象を正確な模写<sup>コピー</sup>によって描写するとしたら？——だとしたらそれはよい描写ではないのか？——それではいかなる変化も示されない。(PU-II, 131: 強調筆者)

このアスペクト変換の体験において、わたしに見える色もかたちも変わってはいない。しかし、枝と人間とでは、あきらかに見え方が違う。しかし、判じ絵自体が物理的に変化したわけではないのだから、その変化はわたしの内部に想定されざるをえない。しかも、わたしの内部の視覚印象にそなわる色彩と形状もやはり変化したわけではないのだから、アスペクトの変換を説明するにはもうひとつの要素を想定しなければならない。それは、同じ色とかたちをもった視覚印象をときには枝の像たらしめ、またときには人間の像た

らしめる、視覚印象の「構制」である。こうして、アスペクト変換という不思議な現象を説明するという重荷を、ひとり「構制」なるものが背負うことになる。ところが、ではその「構制」は枝の場合と人間の場合とでどう変化したのだろうか？ 枝に見えている場合の「構制」を、人間に見えている場合の「構制」との違いが分かるように模写できるのだろうか？——こうして、「構制」がじつはひたすら空回りする遊び車にすぎず、したがって「機械の一部ではない」(PU-I, 271) ことが露呈する。

こうした、いわば「内的なものの神話」に対する批判においてウイトゲンシュタインが多用するもっと基本的な手法として、哲学者が説明のために導入する概念に不当なアナロジーが含まれていることを暴露するという手法がある。次の文章も、それを応用したものであろう。

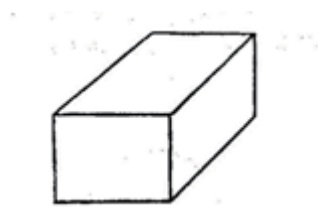
また、「だがわたしの視覚印象は<sup>・</sup>図画 [Zeichnung] ではない。それは<sup>・</sup>これ——わたしが誰にも見せることのできないもの——なのだ」などとはぜったいに言ってくれるな。——もちろん視覚印象は図画などではない。かといって、<sup>・</sup>図画と同じカテゴリーに属するが、わたしが自分の中に抱いているようなもの、でもないのだ。(PU-II, 132: 強調筆者)

「内的な像」という概念は誤解を招きやすい。なぜなら、この概念の原型は「<sup>・</sup>外的な像」であるが、両概念語の使用は、「数詞」という語と「数」という語の場合におとらず、似ていないからである。(じっさい、数を「イデア的な数詞」と呼びたがる者がいるとしたら、彼はそれで似たような混乱を引き起こすかもしれない。)(PU-II, 133)

哲学者の過失は、他の歯車と噛み合っていない遊び車や不当なアナロジーを生み出すという、比較的無害なものだけにはかぎられない。哲学的説明はしばしば、すべての神秘の化身のようなキマイラを生みだしてしまうことがある。次の引用文で批判されているのはまさにそれである。

視覚印象の「構制」を色やかたちと同列に置く人は、内的対象としての視覚印象から出発している。それによってこの対象はもちろんばかげたもの——妙に不安定な構成物——になる。なぜなら、いまや像との類似性は損なわれているからである。(PU-II, 134)

たとえば、PU-II, 116 で挙げられている図を見てみよう。



(図 1)

この図の可能なアスペクト（ガラスの立方体、ひっくり返された空き箱、平面上の針金の枠、ひとつの立体角をつくる三枚の板）の中には、まったく異質なものもある。ところが、アスペクトの変化がひとり「内的対象としての視覚印象」に背負わされることによって、色もかたちも変えないまま三次元立体であったり二次元図形であったりしうのような内的な像というキマイラが生みだされる。これがキマイラなのは、そんな性質をもった物理的な（外的な）絵や図など、われわれは見たこともないからである。



もちろんこう言うことはできる。すなわち、「像ウサギ」という概念と「像アヒル」という概念<sup>(8)</sup>のいずれにも包摂されるような、ある種のもが存在する。そしてそのようなものは、像であり描画なのだ。——しかし印象が、像アヒルの印象でありながら同時に像ウサギの印象でもある、ということはない。(PU-II, 157)

哲学のばからしさが極まるのは、このように生みだされたキマイラが結局は遊び車でしかない場合であろう。かくしてアスペクト視の内的過程モデルへのウィトゲンシュタインの批判は、次の文章に極まる。

「わたしが本来見ているものは、やはり、対象からの影響によってわたしのうちで生じるものでなければならない。」——すると、わたしの中で生じるものとは、一種の写像であることになる。すなわち、それ自体がこれまた直観されうるもの、ひとが目の前に置くことのできるもの、いわば物質化された霊 [Materialisation] のようなものであることになる。

そしてこの物質化された霊は、なにか空間的なものであって、ゆえに空間的な概念でもって完全に記述されうるものでなければならない。それはたとえば(もしそれが顔であるなら)微笑むことができる。しかし、親しみやすいといった概念は、その描写の中には含まれない。それはこの描写には(たとえこの描写の役に立つことがあるとしても)なじまないのである。(PU-II, 158)

だが、第 xi 章のアスペクト論をただこのように見るだけでは、それを結

局は(たとえば『確実性について』として死後出版されたノートと同じように)途中で投げ出された不完全な仕事として見ることでしかない。なぜなら、第一部のワイトゲンシュタインは——その詳細に関しては解釈が分かれるとしても——規則順守が逆説的に思われる者が陥っている暗黙の前提を暴露することによって、規則順守をつつむパラドキシカルな空気を払拭することに成功していると言えるのに対して、アスペクトの閃きのパラドクスに関しては、すくなくとも第 xi 章においては、それに対応することが完遂されていないように見えるからである。つまり、「実践」(PU-I, 202)や「慣習」(PU-I, 198)や「一致」(PU-I, 224, 241-2, 355)や「生活形式」(PU-I, 241)といった観点から規則の把握を見るということに対応するものが、アスペクトの閃きの場合にははっきりしないのである。

とすると、PU-II, 131 が指摘しているように見えるパラドクスは、規則順守のパラドクスの解消とは異なる方法で、すでに第 xi 章の内部で解消されているのだろうか。ヒントとなるのは、ワイトゲンシュタインの次の発言である。

「この図形を……として見ること」には、なにか神秘的な、とらえがたいところがある。「なにかが変化したのになにも変化していない」とひとは言いたくなる。——しかしそれを説明しようとしてはならない。むしろそれ以外の〈見ること〉も神秘的だとみなさねばならない。(BPP-I, 966)

〈見ること〉の一定の部分がわれわれに謎めいて見えるのは、〈見ること〉の全体がわれわれにとってじゅうぶんに謎めいて見えていないからであ

る。(PU-II, 251)

なにも変わっていないことは見て分かっているのに、先ほどとはまったく違うものが見えているという体験がパラドキシカルに見えるのは、その特殊な体験に対する暗黙の理論的先入見のせいばかりではなく、そもそもわれわれがなにかを見るということ一般（アスペクト視はその一部である）に対する暗黙の理論的先入見のためでもある——そうウイトゲンシュタインはここで言っているように見える。そしてマルハルは、後者の先入見の暴露こそが第 xi 章におけるウイトゲンシュタインの戦略の中心であると解釈する。彼は、第 xi 章におけるウイトゲンシュタインの戦略を、「単独で見られた特殊な現象に対してわれわれを感じる困惑を、その現象をもっと大きな全体の一部をなすものとして——像がわれわれの生活の中で果たしている特異な役割のひとつの発露として——展望的に描写することによって解消すること」(Mulhall (2010), 265) と総括し、Mulhall (1990) や Mulhall (2001) における彼自身の戦略を、「アスペクトの閃きに対してわれわれの感じる困惑を、われわれの〈像のある生活〉[our lives with pictures] というもっと広い脈絡の中にそれをあらためて置いてみることによって解消する」(Mulhall (2010), 264) ことだと宣言する。そして、このウイトゲンシュタインの戦略において中心的役割を果たすのは、マルハルによれば、それまでのアスペクト論解釈においてさほど重きを置かれていなかった「恒常的アスペクト視」という概念である。

## 2.-2. 中心としての恒常的アスペクト視

アスペクト知覚にまつわる諸現象としてウイトゲンシュタインが第 xi 章

で言及しているものは、その実質が正しく理解されているかは別として、ほとんどがすでによく知られている。主だったところを挙げるなら、「アスペクトの閃き」<sup>(9)</sup>、「アスペクト変換」<sup>(10)</sup>、「アスペクト盲」<sup>(11)</sup>、「恒常的アスペクト視」<sup>(12)</sup>、「として見る (Sehen-als)」<sup>(13)</sup>、「とみなす (Halten-für, Betrachten-als)」<sup>(14)</sup> といったところであろう。

ところでマルハルは、前節の最後でも触れたように、第 xi 章において中心的な役割を果たしているのは、全面的なアスペクト盲という現象に対立するものとしての「恒常的アスペクト視」であると主張する。この概念は次の節で「アスペクトの閃き」とともに導入されている。

またわたしは、あるアスペクトを「恒常的に見ること [das stetige Sehen]」と、アスペクトの「閃き [Aufleuchten]」とを区別しなければならぬ。

わたしはこの絵をずっと見せられていたのに、しかしそこにウサギ以外のものは一度も見なかった、ということだってありえたのである。

(PU-II, 118)

マルハルの解釈はやはり驚くべきものに見える。頻度は重要性の決定的基準にならないとはいえ、「恒常的アスペクト視」は『探究』第二部全体でもたった二回しか登場しない。むしろウィトゲンシュタインの議論の比重は「アスペクトの閃き」や「アスペクト変換」に置かれているように見えるし、なによりもマルハル自身が、アスペクトの閃きの謎を指摘することから第 xi 章が始まっているという見方にこだわっているのである。ところがマルハルは、ウィトゲンシュタインがアスペクトの閃きや変換に置いているよ

うに見える比重は、世界に対するわれわれの関係が本質的に恒常的アスペクト視であることを明らかにするという重要な補助的役割をそれらが担っているためである、と主張する。「(……) 特定のアスペクトの閃きの経験はいずれも、われわれが所与の存在者を新たな種類の対象として見ることができることをわれわれに気づかせることによって、われわれがすでにそれをある特定の種類の対象とみなしている——それがどの種類かというのは、〈として見る〉図式の第一座を占める概念群によって決定される——という事実<sup>(15)</sup>に光を当てるのである(……)。」(Mulhall (1990), 136)<sup>(15)</sup>のちにもっと詳しく見ることになるが、彼によれば、恒常的アスペクト視こそ人間が世界を家としてそこに住み着くその本質的な様態であり、したがって、彼がそれと対置する「全面的アスペクト盲」という症状(?)は、いわば世界をおのれの住処としていない存在者のあり方であることになる。

ここから、なぜマルハルがよりによってウイトゲンシュタインのアスペクト論をハイデガーの現存在分析論(とくに『存在と時間』第一篇第三章の「世界性(Weltlichkeit)」の現象学的-実存論的分析)と連関させようとしているのかも見えてこよう。ハイデガーは、伝統的な形而上学と認識論は、現存在が「さしあたりたいていの場合(zunächst und zumeist)」親密さをもって埋没している日常の世界が破壊されることによって成立したものにすぎないと批判する。伝統的な存在論的カテゴリー(実体、客観、対象など)は、もはや日常的現存在の生き生きした交渉の相手(Womit)たりえない死骸のような欠損態なのである。それは典型的には、道具がなんらかの原因で故障し、道具が道具として機能しているときに現存在に見せる相貌——手許性(Zuhandenheit)と呼ばれる——が、純粋な観察の対象という相貌——客体性(Vorhandenheit)——に乗っ取られるというかたちで起こる。

だが、以上の診断的な「欠損性論証」は、『存在と時間』の当該箇所では、ハイデガーの世界内存在の現象学の諸テーゼに支えられている。ここで重要と思われる論点を簡単に挙げておこう。

1) ハイデガーにとって、現存在がその「内に (in)」あるところの世界とは、存在者の寄せ集めでも秩序づけられた総体でもなく、たとえばハンマーがハンマーとして現存在に出会われることを可能とする、目的－手段関係のネットワークのことである<sup>(16)</sup>。このネットワークをハイデガーは、「さし向け連関 (Verweisungszusammenhang)」(SZ, 70)、「適在全体性 (Bewandtnisganzheit)」(SZ, 84)、「有意味性 (Bedeutsamkeit)」(SZ, 87) などと呼ぶ。

2) しかし、ハンマーがハンマー「として」ハンマーらしく出会われるとは、日常的には、むしろそれが——鉄と木でできた物理的対象としてではないのはもちろん——そもそも使用者の意識にほとんど上らないということである。

3) ハンマーが目立ってしまうのは、それが重すぎたり、大きすぎたり、壊れてしまったりして「手頃 (zuhanden)」ではないことによって、ハイデガーが「日常的交渉」と呼ぶものが阻害される場合である。

4) しかしこの阻害状況において、ある注目すべきことが起こる。それは、そのハンマーをハンマーとして出会わせていた、そしてそのためには存在者の背後に沈んでいるのでなければならなかった（にもかかわらずある意味で見とられているのでなければならなかった<sup>(17)</sup>）使用者の仕事場（「環世界 (Umwelt)」の有意味性のネットワークが露わになるということである。これをハイデガーは、世界の世界性が閃く (das Aufleuchten der Weltlichkeit der Welt) と表現する (cf. SZ, 75)<sup>(18)</sup>。

マルハルはハイデガーのこうした議論に着想を得て、しかもアスペクト盲

をワイトゲンシュタイン同様「意味盲」<sup>(19)</sup>と重ね合わせつつ、こう主張する。ハンマーが鉄と木でできた物理的対象「として」見えていない者、その意味でその「物理的実在性」にすら気づかずにハンマーを振っている者は、ハンマーをハンマーたらしめている有意味性連関にそれだけ深く通暁している。言葉の意味を経験するとか、言葉のうちに意味の相貌を見るというわたしの力も、そうしたことと類比的であるどころか、そうした現象の一種である。そうした力は、言葉の使用技術にわたしがどれだけ通暁しているかに、またそれと相関的に、当該の語がそれ自身の有意味性の脈絡をそれ自身のうちにどれだけ吸収同化しているかに依存する。したがって、ある語を十回繰り返して発すると意味が失われてただの音に「なる」という経験をもたない者は、その語が意味をなす脈絡と使用技術に、その語それ自体がそれらを吸収同化しているように見えるほど通暁していないのであり、言ってみれば、ハンマーがハンマーらしい顔を見せる環境世界に通暁していない者のように、その語が意味の顔を見せるような世界に通暁していないのである。ハイデガーとワイトゲンシュタインの議論は、そうした疎外された異邦人の観点から知覚と言語にアプローチすることに対する警鐘として読めるのである (cf. Mulhall (1994), 45, 120f.)。

かくして、ハイデガーの世界性分析において「道具の故障」に置かれている方法的意義にほぼ対応するものを、マルハルはアスペクトの閃きに読み込むのである。

要するに、アスペクトの閃きと恒常的アスペクト知覚との連関は、アスペクトの閃きを次のような脈絡と見なしたほうがもっとはっきり見えるのかもしれない。それは、われわれの焦点はふつう、対象がそのために

手頃で〔ready-to-hand: zuhanden〕あるところの目的に当てられているのだが、この焦点が妨害され、対象それ自体へと移され、かくしてその概念枠を閃かせ、それがわれわれと対象との日常的出会いを満たしている〔*inform*〕という事実を暴露する、という脈絡である。(ibid., 151)

### 2.-3. 像対象の役割

マルハルのこの解釈は、ワイトゲンシュタインが第 xi 章で導入している「像対象 (Bild-Gegenstand)」という妙な概念の眼目をうまく説明できるように思われる。その概念は次の文章で導入されている。

ここで、像対象という概念を導入するのが有益である。たとえば次のような図形は「像顔」ということになる。



(図 2)

わたしはこの顔に対していくつかの点で、人間の顔に対するのと同じようにふるまう。わたしはその表情を研究したり、それに対して人間の顔の表情に対してするのと同じような反応をしたりすることができる。子供は像人間や像動物に対して話しかけたり、人形でも扱うようにそれらを扱ったりする。(PU-II, 119)



したがってわたしはウサギアヒル<sup>(20)</sup>の頭を最初から単純に像ウサギとして見ることもできたのである。つまり、「それは何だ?」とか「きみはそこに何を見ているのだ?」と訊かれたら、わたしは「像ウサギだ」と答えていたであろう。それは何なのか、とひとがわたしをさらに問い詰めたとしたら、わたしは説明のためにありとあらゆるウサギ像を、おそらくは本物のウサギをも指し示して、この動物の生態について語ったり、あるいはその真似をしたりしたことであろう。(PU-II, 120)

ここでの記述から、「像対象」(ここで「対象」の部分がいわば変項になっている)という概念が、ウイトゲンシュタインが「とみなす(Betrachten-als)」と呼ぶものと深いかわりがあることが読みとれる。

おそらくこう表現したほうがよかったであろう。われわれは、写真やわれわれが壁に掛けている絵画を、そこに写されている対象それ自体(人間、風景、等々)と<sup>・</sup><sup>・</sup>みなす [*betrachten als*] のだと。(PU-II, 197)

人間や家屋や樹木の写真を眺めている人が、その写真に立体性がなくて物足りなく思うなどということはない。その写真を平面上に色の染みが寄せ集まったものとして記述することのほうが、われわれにとっては容易ではなからう。(……) (PU-II, 252)

マルハルによれば、像対象に関するウイトゲンシュタインの議論は、知覚の解釈モデルに基づいたアスペクト視の説明(知覚は中立的なセンスデータに解釈が加えられることで成立するのであり、したがってアスペクトの変換

はその解釈の部分に変換することによる、という考え)が、この単純な線画の知覚に関してすら、ということつまり、そのモデルによる説明が最適であると思われる事例に関してすら、誤っていることを示している。解釈モデルは、「ウサギ相が見えていること」と「これがウサギにも見えるのをただ知っているだけ」とを区別できない。なぜなら「像ウサギを見る」とは、この線画をウサギとみなすということ、像ウサギを本物のウサギのように扱うということであり、たとえばそのウサギがだれそのの飼っていたあのウサギに似ているとか、やや目が離れすぎていて可愛くないとか、なんだか愛着がわいて無碍にゴミ箱に捨てられなく思う、ということだからである——マルハルが言おうとしてうまく言えていないことを(ややカヴェル風に)代弁するなら、像ウサギを本物のウサギのように扱いたくなるわれわれの傾向性は、本物のウサギが住むような世界に対するわれわれの通暁と親密さ(愛着)の証しである、ということになろうか。こうしたことは、この絵がウサギにも見えることをただ知っているだけの者には不可能であろう。彼はまさに解釈モデルの申し子である。彼には、ウサギ相が見えない代わりに、ウサギ相が見えているわれわれにはふつう見えないものが、つまり特定の色とかたちの幾何学的配列が見えている。しかも彼は、それがウサギ相に見えるということを知っている。したがって彼においては、中立的なセンスデータとそれに加えられるべき解釈とがまさに乖離していると言えよう。このような者は、本物のウサギの住むような世界に住みながら像ウサギを見る者ではないのである。(cf. Mulhall (1990), 20-21)

#### 2.-4. アスペクト視の規準

おそらくマルハルは、そもそもわれわれがなにかを「見る」ということは

すべて、「そう（も）見えるのをただ知っているだけ」とはまったく異なるということから、すべての「見る」は、恒常的アスペクト知覚であると結論づけたのである<sup>(21)</sup>。この推論を媒介するのが、前節で特徴づけられたようなものとしての「とみなす」は恒常的アスペクト知覚の別名であるという彼の解釈である（cf. Mulhall (1990), 23）。ここからマルハルは、「痛み」に関してウイトゲンシュタインがしたのと同じように、アスペクト視のふるまいにおける「外的規準」（PU-I, 580<sup>(22)</sup>）に注目することによって、アスペクト視とアスペクトの閃きを内的過程モデルから決定的に脱却させようとする。たしかに、ウイトゲンシュタインが「見る」——「見えている」——は外的規準を必要とするという考えに傾いているように見える文章も存在する。

わたしは、その図をこの動物として見ている人からは、その図でなにか表されているかをただ知っているだけの人からは違うことをいろいろと期待するであろう。（PU-II, 196）

ではわたしはどのような場合に、それはただ知っているだけであって、見ているわけではない、[ein bloßes Wissen, kein Sehen] と言うのだろうか？——たとえば、ある人がその絵を設計図のように扱って、それを青写真のように読む、といった場合である。（ふるまいの微妙な綾[Feine Abschattungen des Benehmens]。——なぜそれが重要なのか？それが重要な帰結をもつからである。）（PU-II, 192）

「ふるまいの微妙な綾」——なんとも頼りない規準である。痛みのふるまいにおける規準（ゆがむ表情、滲みでる脂汗、苦しそうな呻き声、なりふり

かまわぬ所作……)と比べても、いかにも頼りない。アヒルウサギ(図3)のアヒル相が見えていない者とは、アヒルウサギを設計図のように読んでいることがそのふるまいから見てとれる者であるというのだから。しかも、その規準を読みとること自体が、これまた微妙なこつを要するように思われる。

しかし、この「ふるまいの微妙な綾」「が重要な帰結をもつ」というウィトゲンシュタインの言葉を、マルハルはまったくまじめに受けとるのである。彼によれば、アスペクト視の規準とは、像(アヒルウサギ)をその表しているもの(たとえばアヒル)の観点から言語によって記述したり取り扱ったりできるということだけにあるのではない。それだけならば、「ただ知っているだけ」の者にも可能であろうし、なによりも、「像(Bild)」とはその定義からして、それが描写している対象の観点から記述されるべきものであるからである。この規準が「微妙」であるゆえんは、それがむしろそのようにふるまう際の躊躇のなさ、当然視(the taking for granted)、無媒介性(直接性)、自発性(ある表現へと自然に手が伸びること、たとえば、アヒル相からウサギ相への変換を、「あっ、いまウサギになった!」と、本来なら対象自体の変化についての知覚報告にふさわしい表現がおのずと出てくること)などにあるということなのだ(cf. Mulhall (1990), 23-4, 42, 73-4, 149)。そのうえでマルハルはこれらの規準を、ハイデガーが日常的交渉において出会われる道具的存在者のあり方とした *Zuhandenheit* と関係づける(cf. *ibid.*, 18, 23-4, 73-4, 120-22)。これと対照的に、「ただ知っているだけ」の者、あるいは「アスペクト盲人」のふるまいにおける外的規準は、つかえたり躊躇したりすること、疑念、自信のなさなどであり(cf. *ibid.*, pp.148-9)、これをマルハルはウィトゲンシュタインの言葉(cf. BPP-I, 324)を借りて一言で「ロボットめいていること」(cf. *ibid.*, pp.85-9)と形

容するのである。

## 2.-5. アスペクト視の基礎としての「技術への通暁」

アスペクト視(として見る)と「ふるまいの微妙な綾」と手許性(Zuhandenheit)——この三つがハイデガーの日常性の現象学において密接に関連しているのは2.-2. で見たとおりであるが、ハイデガーにおいてこの連関を強固なものたらしめているのは、「理解(Verstehen)」についての彼の考え方である。ハイデガーにとって「理解」とは、現存在が世界の内でもう「ありうる(sein können)」かを現存在自身に知らしめる開示性(Erschlossenheit)の様態であるが、それは伝統的に「表象(Vorstellung, representation)」と呼ばれてきたものの一種ではなく、なんらかの心的過程や心的作用の一種でもない。彼は、「なにかを理解している(etwas verstehen)」というドイツ語の表現が日常的に用いられる場面に注意をうながし、自分が「理解」を開示性の様態を指すものとして用いる場合にはむしろこの日常的用法の意味で理解してもらいたいと言う。それによれば、理解しているとは、「ある事柄を切り盛りできる(einer Sache vorstehen können)」、「それをするだけの力をつけている(ihr gewachsen sein)」、「あることができる(etwas können)」(SZ, 143)といったことを意味する。したがって、理解しているとは、できるということ(das Können)であり、命題知(know-that)よりは技能知(know-how)のほうに近いと言える<sup>(23)</sup>。

マルハルは、これと類似の連関をワイトゲンシュタインのうちにも見ようとする(cf. Mulhall (1990), 148-9)。たしかに、アスペクト視の基礎にはある技術への通暁があるとワイトゲンシュタインが考えているように思われる文章は存在する。

もしもわたしが、画法幾何学のある作図を観察しながら、「わたしは、この線がここでまた現れるのを知っているが、しかしそれをそのように見ることができない」と言うとしたら、これはなにを意味するのだろうか？ それは単純に、わたしがその作図での操作に熟練していないということ、つまりわたしがそれにあまりよく「通暁して〔auskenne〕」いないということなのだろうか？——さよう、この熟練〔Geläufigkeit〕はたしかにわれわれの規準のうちのひとつではある。ある人がその作図を立体的に見ているということのをわれわれに納得させるものは、彼が示す一定の種類「通暁」である。それはたとえば、立体的関係を示唆する一定のジェスチャーだとか、ふるまいの微妙な綾などである。

わたしはその絵に、矢が動物を射抜いているのを見る。矢はその動物の喉に当たり、うなじから突き出ている。この絵は影絵であるでしょう。——きみにはその矢が見えるのか？——きみはただ、この二本の棒はどちらも一本の矢の一部を表すものだけを知っているだけなのか？（……）（PU-II, 180）

「でもそれは見るということではないだろう！」——「いやそれでも見るということなのだ」——このどちらにも概念的には言い分があるはずだ。（PU-II, 181）

やはりそれは一種の〈見ること〉なのだ！ いかなる意味でそれは〈見ること〉なのだ？（PU-II, 182）

ここでウィトゲンシュタインは、「技術への通暁」をアスペクト視という

視覚現象の規準とすることの不自然さと格闘しているように見える。たしかにこれは、「われわれはどのような場合にそう言うか」についての文法的確認にすぎないと言って済ませられる問題ではない。ウィトゲンシュタインにとって、ある事柄の「規準」（「徴候」と区別されたものとしての）についての文法的言明は、同時に当のその事柄自体の可能性の条件についての言明でもあるからである<sup>(24)</sup>。事実、次の文章には、「われわれはどのような場合にそう言うか」についての単なる文法的確認のように見える言明と、規準による「構成」を主張しているように見える言明とが、混在している。

わたしは三角形において、いまはこれを頂点、これを底辺として——そして今度はこれを頂点、これを底辺として——見ることができる。——明らかなのは、たっいま頂点や底辺などの概念にお目にかかったばかりの生徒にとっては、「わたしはいまこれを頂点として見ている」という言葉はまだなにも伝えることができない、ということである。——しかしわたしは、これを経験命題として言っているわけではない。

彼はそれをいまはこう見ており、今度はこう見ている、と言われるのは、慣れた手つきで図形を一定の仕方で使用することができる人についてだけである。

この体験の土台は、ある技術に習熟しているということなのだ。  
(PU-II, 222)

ウィトゲンシュタインは、ハイデガーが「理解」を「あるものをあるものとして見る」という体験の超越論的条件として考えているのと同じように、技術への通暁を「として見る」という体験そのものの可能性の条件——「土台」

——として考えようとしているように見える。頂点という概念にじゅうぶんに習熟していない生徒にとって「いまこれを頂点として見ている」という言明が意味をなさないということは、経験的な事柄ではないというのだから。結果として彼は、事柄を正しく記述するためにはここで「体験」という概念が変容されざるをえないのだ、という考えに傾くことになる。

しかし、このことが、ひとがこれこれを体験するということの論理的条件であるべきだというのは、なんと奇妙なことだろう！ だってきみは、「歯痛をもつ」のはこれこれを行うことのできる者だけだ、などとは言わないだろう。——ここから帰結するのは、われわれがここで同じ体験概念を相手にしていることはありえないということである。それは、類縁関係はあるとしても別の概念なのである。(PU-II, 223)

これこれができる者、それを習得している者、習熟している者、こうした人についてのみ、彼はこれを体験したと言うことが意味をなすのである。

そして、もしこれがばかげて聞こえるなら、きみは、見るという概念がここでは変容しているということを考慮に入れねばならない。(……)  
(PU-II, 224)

「……として見ること」は、知覚の仲間ではない。またそれゆえ「として見ること」は、見ることに似ているところもあれば、似ていないところもある。(PU-II, 137)



言ってみれば、どのアスペクトを見ているかということに関わる表現は、対象がどのように扱われているか——ある技術が習得されている——ということの表現でありながらも、ある状態の記述として用いられているのである (cf. BPP-I, 1025)。

## 2.-6. 態度としてのアスペクト視

マルハルはさらに、恒常的アスペクト視とは——したがってわれわれの「見ること」全般が——純粋な視覚現象であるというよりは、むしろ態度の問題であり、究極的には、一定範囲の世界（環世界）に対するわれわれの態度の問題である、というハイデガー的結論をウイトゲンシュタインから引きだそうとする。

(……) 画像との関係における恒常的アスペクト知覚（と見なすこと）は、態度の問題であり、ある絵画なり線画なりをどう受けとっているかの問題である(……)。絵画や線画の内部構成だとか他の種類の対象との正確な関係などに気づいているという特定の様態の気づきは、単純に、それがこの特定の絵画として同一であることをわれわれがどれだけ当然視しているかというその度合いが、どういう仕方でわれわれの生活の中で示されるかということである。このように絵画を受けとるということは、自分が「本当に」見ている色や形に基づいて知覚者が立てる仮説などではなく、むしろひとつの姿勢であって、知覚者がさらにすすんで一定の仮説を立てるのは、この姿勢によって与えられる枠組みの中においてなのである。(Mulhall (1990), 27-8)

マルハルがこの解釈の典拠にするのに最適のワイトゲンシュタインの文章としては、『心理学の哲学』からの以下のものが挙げられるであろう。

「それはわたしにとっては、矢で射抜かれた動物だ。」わたしはそれをそうしたものとして扱う。これが、この図形に対するわたしの態度である。これが、それを「見ること」と呼ぶことの意味のひとつである。(PU-II, 193)

わたしが彼に「きみの態度を……のように変えてみたまえ」と言うとしよう。——彼がそのとおりにするとしよう。——そしていまや彼の内でなにかが変化した。「なにか」が？ 変化したのは彼の態度であり、ひとはその変化を記述できる。その態度のことを「彼の内のなにか」と呼ぶのは誤解をまねく。そう言うと、まるでわれわれがいまやなにかあるものをおぼろげに見ることが、あるいは感じることができ、それがすなわち変化したものであり、「態度」と呼ばれるものであるかのように思われる。すべてが明瞭に白日の下に置かれているにもかかわらず——しかし「新たな態度」という言葉が感覚を指すのではないのはたしかである。(BPP-I, 1110)

「態度」の記述とはどのようなものか。

たとえばひとは、「これらの汚点は無視しろ、またこのわずかな不規則性も無視して、これを……の像として見よ」と言う。

「それがないものと考えてみたまえ。この……がなかったとしても、きみはそれをやはり不快と感じるか。」しかしわたしは——まばたきし

たり細部を無視したりすることによって——自分の視覚像を変化させているのではないか、とひとは言うであろう。この「……を無視する」ということは、たとえば新しい像を作り出すこととまったく同じような役割を果たしているのではないかと。(BPP-I, 1111)

なるほどそのとおりだ——それは、われわれが自分の態度によって自分の視覚印象を変化させたのだと言うための正当な理由になる。言いかえれば、それは「視覚印象」という概念の範囲をそのように限定することの正当な理由になる。(BPP-I, 1112)

### 3. マルハルの解釈の問題点

さて、以上のマルハルの議論には、そもそもウィトゲンシュタイン解釈としてあきらかに疑わしい点がある。現に、Day & Krebs (2010) に寄せられた諸論文の多くが、彼のウィトゲンシュタイン解釈の問題点を指摘することを議論の足掛かりにしている。しかし、マルハルの解釈の核心的問題点をもっとも明確かつ執拗に指摘しているのは A・バズ (Baz (2000); (2010)) であると言ってよかろう。彼のマルハル批判は次の節で詳細に吟味することにして、本節ではまず、バズが指摘しているものとは別のマルハルの解釈の問題点を四つ指摘しておきたい。

#### 3.-1. 「アスペクト盲」についてのマルハルの誤解

「アスペクト盲」という概念は、ウィトゲンシュタインの使用脈絡を離れてややひとり歩きしている感があるが、この概念の下にひとはすくなくとも

次の二つの異なる現象を考えているようである。(1)ひとつは、たとえばある人にウサギアヒル頭(図3)のウサギ相がどうしても見えない(閃かない)という現象ないしは症状であり、(2)もうひとつは、アスペクトが変換するのを見ることができないという現象ないしは症状、たとえば、「sondern」という語を動詞としてと接続詞としての二通りの仕方で聞くことができないという現象(cf. PU-II, 261)である。

ところでマルハルは、恒常的アスペクト知覚を「アスペクト盲」と対置しているところから、「アスペクト盲」ということであきらかに(1)の現象のことを考えている。しかしながら、「アスペクト盲」という概念が導入されるPU-II, 257-8をきちんと最後まで読めば、その解釈が誤っていることは明白である。

ここでこういう問いがもち上がる。あるものがあるものとして見る能力が欠けている人間は存在しうるだろうか?—またそれはどういうことだろうか。それはどんな結果を生むだろうか?—この欠陥は、色盲と比較されるべきなのか、それとも絶対音感の欠如と比較されるべきなのだろうか?—われわれはこの欠陥を「アスペクト盲 [Aspektblindheit]」と呼ぼうと思う—そしてわれわれは、それでもって言われているのが何でありうるかを、よく考えてみたいと思う。(これは概念的な探究である。) アスペクト盲の人は、アスペクトAが変換するのを見ることができないということになる。しかし彼は、二重十字<sup>(25)</sup>に黒十字と白十字が含まれていることも認識しないということになるだろうか? つまり彼には、「これらの図形の中から、白十字を含んでいるものをわたしに示せ」という課題を果たすことができないということになるだろう

か？ そんなことはない。それなら彼にもできる。しかし彼には、「いまそれは白地に黒の十字だ！」とすることができないはずである。

彼は二つの顔の類似性に対しても盲目だということになるのだろうか？——しかしそうだとすると、同一性に対しても、あるいはほとんど同じということに対しても、彼は盲目なのだろうか？ これに決着をつけるつもりはわたしにはない。(彼は「このように見えるものをなにかわたしに持ってきなさい！」といった類の命令を実行することはできないはずである。)(PU-II, 257: 強調筆者)

彼は立方体の見取り図を立方体として見るができないことになるのだろうか？——〔かりにそうだとすると〕そこからは、彼がそれのある立方体の描写として(たとえば設計図として)認識することはできないということは帰結しないであろう。しかし彼にとっては、その見取り図があるアスペクトから別のアスペクトへ飛躍するということはないであろう。——問題。彼はそれを、われわれと同じように、事情によってはひとつの立方体として受けとることはできるだろうか？——もしできないなら、それを一種の盲目と呼ぶことは正しくないであろう。

「アスペクト盲人」は、像に対して、そもそもわれわれとは異なる関係を持っているのであろう。(PU-II, 258: 強調筆者)

「アスペクト盲」ということでウィトゲンシュタインが考えているのが(2)の現象だけであることはもはや明白である。その意味でアスペクト盲は色盲と比べられるものではない——これに対してアスペクト盲を(1)の意味で理解している者は、アスペクト盲と色盲の類似性を否定できないであろう。そ

して、(1)をあらわす特別な用語は、じつは『探究』にも、またその第二部の元になった『心理学の哲学』(BPP)にも『心理学の哲学についての最後の文書』(LW)にも存在しないのである (cf. Gould (2010), 66)。おそらくマルハルは、PU-II, 257 冒頭の「あるものをあるものとして見る能力が欠けている」という状態を「アスペクト盲」と呼ぶことにしようというぐだりに惑わされているのであろう。この論点、すなわち、アスペクト盲人が、他の者には見える相貌がどうしても見えない者のことではなくて、相貌が変わるのを体験できない者であるということは、後に 3.-5. で見る、ウイトゲンシュタインにとってのアスペクトの本質的特徴と重要な関連性をもつ。

### 3.-2. 「アスペクト視の規準」についてのマルハルの誤解

上の 2.-5. で見たように、マルハルはアスペクト視の「規準」を、言語的ふるまいや非言語的ふるまいの自然さや流暢さや自発性とみなし、それをハイデガーの *Zuhandenheit* という用語で統括的に表現することで、彼の日常的現存在の現象学の豊かな内容をウイトゲンシュタインのアスペクト論にとって利用可能にしようとしていた。しかし、そうした短絡をウイトゲンシュタインが許さないだろうと考える根拠となりそうな文章も、実際に第 xi 章には見られるのである。

ところで、わたしがその絵に球体が「浮かんでいるのを見る」というのはどういうことなのだろうか。

それは、わたしにとってはこの記述がもつとも自然な、自明の記述〔die nächstliegende, selbstverständliche Beschreibung〕であるということだけに尽きるのだろうか。そうではない。それがもつとも自然で自明

の記述であるのには、さまざまな理由がありえよう。たとえばそれはたんに慣例となっている記述であるのかもしれない。

しかし、わたしがその絵を、たとえばそう理解している（それがなにを描いているはずなのかを知っている）だけではなく、そう見ている、ということの表現とは何なのか——そのような表現とはたとえば、「その球は浮かんでいるように見える」、「それが浮かんでいるのが見える」、あるいはまた特別な口調で言われる「浮かんでる！」などである。

つまりこれが、なにかをなにかとみなすこと〔Dafürhalten〕の表現なのである。しかしそれは、そうしたものとして用いられているわけではない。(PU-II, 169: 強調筆者)

その絵が浮かんでいる球体を描いているのをただ理解している（知っている）だけではなく、その球が浮かんでいるのが見えていることの「表現」が、ウイトゲンシュタインにとっても、マルハルが注目しているような一定の言語的ならびに非言語的ふるまいであるということ自体は正しい。しかし、そうしたふるまいがもっとも自然で自明である——手頃（zuhanden）である——ということが、そのまま「見えている」ことの「規準」になるわけではない。おそらくここでも、上の2.-5.で論じた「概念の変容」を問題にすべきなのであろう。たとえば「球が浮かんでいるのが見える」や特別な口調で言われる「浮かんでる！」という言葉は、たしかにあるものをあるものとみなしている（扱っている）ことの表現であるが、しかし、そうした表現として用いられているのではなく、端的に知覚報告として——見えているものの記述として——用いられているのである。おそらくこのずれこそが、アスペクト視という現象の規準のひとつなのである。

### 3.-3. 「恒常的アスペクト視」についてのマルハルの誤解

2.-2. で見たように、マルハルの解釈にとって中心的な現象は「恒常的アスペクト視」である。というのも、彼のアスペクト論の中心的主張は、われわれの世界内存在自体が恒常的アスペクト知覚であるということにあるからである。しかもここで恒常的アスペクト視は、一方ではアスペクトの閃きや変換という現象と対置され、他方では全面的アスペクト盲という症状(?)と対置されている。

ところが、ほかならぬこの恒常的アスペクト視という現象についてのウイトゲンシュタインの説明を、マルハルはあきらかに誤解している (cf. Baz (2010), 241, n.20)。その誤解の根は、「アスペクト盲」の場合と同様ここでも、まさに「恒常的アスペクト視」という概念が導入された節をマルハルが決定的に読み違えていることにある。問題の PU-II, 118 をもういちど見てみよう。

またわたしは、あるアスペクトを「恒常的に見ること [das stetige Sehen]」と、アスペクトの「閃き [Aufleuchten]」とを区別しなければならぬ。

わたしはこの絵をずっと見せられていたのに、しかしそこにウサギ以外のものは一度も見なかった、ということだってありえたのである。

あらためて見てみれば明らかなおりに、あるアスペクトを恒常的に見ることは、「この絵をずっと見せられていたのに、しかしそこにウサギ以外のものは一度も見なかった」という状態、つまりウサギアヒル頭の曖昧さ (多重アスペクト性) に気づいていない者の状態のことである。だとすると、



3.-1. で確認した、正確にウィトゲンシュタイン的な意味でのアスペクト盲人すら、つまりなにかをなにかとして見る（アスペクトの変換を見る）能力を欠いた者にとってすら、ウィトゲンシュタインが言う意味で「あるアスペクトを恒常的に見ること」は可能であることになる。とすると、恒常的アスペクト視を、マルハルが示唆しているように、ひとつの「能力」とみなすことは、すくなくともウィトゲンシュタイン解釈の文脈においては不正確であることになる。それはむしろ、一過性であるかもしれない状態のようなものとして考えられているのである（よって、正確にウィトゲンシュタイン的な意味での恒常的アスペクト視は、マルハルが誤って「アスペクト盲」と呼んでいたものと——同一ではないにしても——家族的類似性をもつ現象である）。それに対して、正確にウィトゲンシュタイン的な意味でのアスペクト盲人は、アスペクトが閃いたり変換したりするのを見ることができない者なのだから、ある能力を欠いている者と解することは正当である。したがって、一種の無能力としてのアスペクト盲は、正確にウィトゲンシュタイン的な意味での恒常的アスペクト視と対置されるようなものではないことになろう。

### 3.-4. 「恒常的アスペクト視」と「アスペクトの閃き」の関係性についてのマルハルの誤解

やはり 2.-2. で見たように、マルハルは、恒常的アスペクト視はアスペクトの閃きに概念的に先行し、突然あるアスペクトに打たれる能力は恒常的にアスペクトを見る力を前提とすると考えている。彼は、「アスペクトの閃きを経験する可能性は、アスペクトの変化が問題となっていない場合の画像記号に対するわれわれの一般的態度の関数である」（Mulhall (1990), 31）と主張する。したがって、「もしもある人に、そうしたアスペクトの閃きの経験

をする能力がないとしたら、画像に対する彼の一般的態度は恒常的アスペクト知覚の態度ではないかもしれないと疑う根拠はある」(ibid., 30) ことになる。

ウィトゲンシュタインは、両者の優先関係についてなにか明言しているわけではない。したがってこれは発展的解釈の問題になる。しかし、マルハルのこの解釈は、彼がアスペクト視の典型例としてウサギアヒル(図3)の例だけに固執していることに起因しているのではと疑うことはできる。ウサギアヒルの場合、先行するもうひとつのアスペクトの候補がはっきりしているからである。しかし、第 xi 章の最初のふたつの節で挙げられているアスペクト視の例は、ふたつの顔に類似性を見るというものである。

「見る」という語のふたつの使われ方。

ひとつはこうである。「きみはそこに何を見ているのだ？」——「わたしが見ているのはこれだ」(これに記述や図画や模写が続く。)もうひとつはこうである。「わたしはこのふたつの顔に類似性を見る」——わたしがこれを伝える相手は、わたし自身と同じくらいはっきりとそれらの顔を見ているのかもしれない。

重要なのは、このふたつの〈見ること〉の「対象」のカテゴリーの違いである。(PU-II, 111)

一方の人がそのふたつの顔を正確に模写し、そして他方がこのスケッチのうちに、前者が見なかった類似性に気づく、ということはあるかもしれない。(PU-II, 112)

そして、この直後の節ではじめて「アスペクトの気づき」という用語が導入されるのである。

わたしはある顔を観察していて、突然、その顔がある他の顔と似ていることに気づく。わたしは、その顔が変わったわけではないのを見て分かっているが、にもかかわらずそれを違うふうに見ているのである。こういった経験をわたしは「アスペクトの気づき [das Bemerkens eines Aspekts]」と呼ぶことにする。(PU-II, 113)

アスペクト視という概念のこの導入箇所をまじめに受けとって、アヒルウサギや二重十字(図4)ではなく、ふたつの顔の類似性に気づくという現象を第一の例として考えるなら、閃くアスペクトはつねに、恒常的に見られていたなんらかの他のアスペクトに取って代わったのだという考えの説得力はなくなる。それと同時に、アスペクトの閃きはわれわれの世界内存在が基本的に(マルハルの言う意味での)恒常的アスペクト視であることをわれわれに気づかせるという重要な補助的役割を担っているという考えの強力な論拠が消えることになる。ちなみに、マルハルとは逆の優先関係を想定するW・デイは、「恒常的に見ること——世界の調度品を当然視すること——は、世界のアスペクトに打たれる能力(関心、欲求)、自分が見詰めるのに答えて世界の顔が変化するのが分かる能力を前提する」(Day (2010), 212)と反論する。もちろん、デイのこの解釈もあくまで発展的解釈である。今の引用からも分かるとおり、デイもまた「恒常的アスペクト視」についてマルハルと同じ誤解をしている。しかし、恒常的アスペクト視がアスペクトの閃きに概念的に優先するというマルハルの発展的解釈には、もはや論拠がないか、あ

ったとしても事例の偏食にもとづく一面的な解釈でしかないことが明らかなのに対して、デイの解釈は、次節で見るように、アスペクトとはそもそもいかなるものかについてのウィトゲンシュタインの考えに根拠を求めることができると思われる。

#### 4. バズのマルハル批判——アスペクトの脆さ

前節の冒頭で触れたように、マルハルの第 xi 章解釈に対してもっとも核心にせまった批判をおこなっているのが、A・バズである。彼は、ウィトゲンシュタインがアスペクト問題に関して述べている重要な点のいくつかをマルハルが見落としていると指摘し、ウィトゲンシュタインにとってアスペクトがいかなるものであるかに関して、マルハルとは正反対の結論に達している。当節では、バズの重要な論点をひとつずつ見ていくことにしたい。

##### 4.-1. アスペクト視は文法的に普遍的ではありえない

マルハルは、われわれの世界内知覚はすべて「として見る」であると言いたいようである。しかし、ウィトゲンシュタインの次の文章からは、アスペクト知覚のそうした一般化は文法違反だとウィトゲンシュタインが考えていたことが窺える。

「わたしはそれをいまは……として見ている」と言ったとしても、それはわたしにとっては意味をなさなかったであろう。それは、わたしがナイフとフォークを目の前にして、「わたしはそれをいまはナイフとフォークとして見ている」と言う場合と同様である。ひとはこの発言を理解

しないであろう。——それは、「これはいまわたしにとってはフォークである」とか「これはまたフォークでもありうる」といった発言が理解されないのと同様である。(PU-II, 122)

ひとはまた、食卓で食器として認識されるものを、食器と「みなす」のでもない。それは、食べるときにひとが普通は口を動かそうと試みたり、動かす努力をしたりしないのと同様である。(PU-II, 123)

「わたしはそれをいまは……として見ている」は、「わたしはそれを……として見ようと努めている」とか「わたしはそれをまだ……として見る事ができていない」などとセットになっている。しかしわたしは、お定まりのライオンの画像をライオンとして見るよう努めることはできない。それはわたしがFをまさにこの文字として見るよう努めることができないのと同様である。(ただし、たとえば絞首台として見ようと努めることならできるが。)(PU-II, 203)

バズの見解はこうである (cf. Baz (2000), 120–21)。たしかにわれわれはいたるところにアスペクトを見ることはできる。しかしそれは、われわれと世界との関係が基本的にアスペクト視の関係にあるからなのではなく、なにかを「それが現にあるところのもの」以上のものとして見る事がわれわれにはいつでも可能だからである。ところがわれわれは通常、アスペクトを見てはいない。なぜならわれわれはふつう、自分が見ているのを知っているものを見ているからである。われわれが見ているのがナイフとフォークであることを教えるのは、ウィトゲンシュタインによればわれわれの言語の文法で

ある。だから、「フォークをフォークとして見ること」について語ることは、本当は意味をなさない。それに対して、ある特定のフォークを、一族の悲しい歴史が凝縮されたものとして見ることは完全に意味をなす。そしてここに、アスペクトに関してウイトゲンシュタインにとって本質的である事柄のすべてが詰め込まれているのである。

#### 4.-2. アスペクト視は文法的に恒常的ではありえない

そうだとすれば、アスペクト視というものは、**文法的に**、恒常的ではありえないことになる (cf. Baz (2010), 246)。そしてそれはウイトゲンシュタイン自身の数多くの証言からも裏づけられる。いずれも重要なものばかりなので、すこし長くなるが引用しよう。

あたかもアスペクトというものは、ただ一瞬ひらめくだけで持続することのないなにかであるかのごとくである。とはいえ、これは**概念**に関する考察なのであって、心理学的考察ではありえない。(BPP-I, 1021)

こう言えよう。像は、わたしがそれを見ているあいだずっとわたしにとって**生きている**わけではない、と。

「彼女の写真は壁からわたしに微笑みかけている。」その写真は、わたしの視線がちょうどそれに注がれるときにはつねにそうするとはかぎらない。(PU-II, 200)

例の三角形のいくつかのアスペクトを思い起こそう。それはちょうど、ある**表象**が〔三角形の〕視覚印象と接触し、そしてしばらくのあいだ触

れたままている、というようなものである。(PU-II, 211)

わたしはこう言いたい。ここで閃くものは、考察されている対象への特定のかわり〔eine bestimmte Beschäftigung〕が続くあいだだけしか持続しないと。(「それ〔ウサギアヒル頭の眼〕がどんな目つきをしているかを見てみよ」)——「わたしはそう言いたい」——だが実際にもそうなのか?——こう自問せよ、「どのくらいのあいだなかがわたしの目を引いているのだ?」——それはどれだけのあいだわたしにとって目新しいのか。(PU-II, 237: 強調筆者)

アスペクトのうちにはひとつの相貌〔Physiognomie〕があって、これは後には消え去ってしまう。これは言ってみれば、そこにひとつの顔があって、それをわたしは最初は真似をし、それから真似をせずに受け入れる、というようなことなのである。——そして、本来これでもう説明は十分なのではないか?——しかし、それではいきすぎではないか? (PU-II, 238)

「わたしは数分のあいだ彼とその父親のあいだに類似性を認めたが、その後はもはや認めなかった。」——こういったことが言えるのは、彼の顔が変化して、ほんの短いあいだだけ彼の父親に似て見えた、という場合であろう。しかしそれが意味しているのは、数分の後には彼らの類似性はもはやわたしの注意を引かなかった、ということでもありうる。(PU-II, 239)

「その類似性がきみの注意を引いた後で——きみはどれくらいのかいだそれを意識していたのだ？」この問いにどう答えられるだろう？——「わたしはすぐにそれのことをもう考えなくなった」、あるいは「それは折にふれて何度もわたしの注意を引いた」、あるいは「彼らはなんとよく似ていることか！ という考えが二三度わたしの頭をよぎった」、あるいは「わたしはたしかに一分間はその類似性に唾然とした」——たとえば答えはこのような具合である。(PU-II, 240)

その類似性がわたしの目を引く、そしてその目立ちは消え去る。

それはほんの数分間だけわたしの目を引いたが、その後はもはや目立たなかった。

そこでなにが起こったのか？——わたしはなにを思い出せるのか？自分自身の顔の表情が思い浮かんでくるが、それを真似することならできよう。わたしを知っている人がわたしの顔を見ていたなら、その人は「彼の顔のなにかがいまきみの目を引いたのだ」と言ったであろう。——またわたしに思いつくのは、自分がそのような場合にたとえば声を出して、あるいは内心だけで、なにを言うかということである。そしてこれで終わりである。——するとこれが目を引くということなのか？ ちがう。これらは目を引くことの現象である。しかしそれが「きみが最初に問い求めていた」「そこで起こっていること」であるのだ。(PU-II, 244)

この星座が、わたしにとってはいつも変わりなくひとつの顔だと思われるとしても、それによってわたしがなんらかの аспекトを名指してい



るわけではない。なぜなら、このことは、わたしがいつもその星座に顔として接すること、それを顔として扱うことを意味するにすぎないが、アスペクトの特異な点は、わたしがなにかを絵の中に入れて見ているという点にあるからである。つまりわたしは、全然そこにはないもの、図形のうちには書かれていないものを見ているのであり、したがって自分がそれを見ることができるということは（すくなくとも後でそれについて反省してみると）わたしを驚かせる、とひとは言うことができるであろう。（BPP, 1028: 強調一部筆者）

アスペクトは、恒常的であるどころか、刹那的で、脆く儂いものである——以上の引用からも明らかなおと、ワイトゲンシュタインはそのことに執拗にこだわっている。「恒常的アスペクト知覚」という案山子に夢中になるあまり、アスペクトのこの側面に対するワイトゲンシュタインのこだわりを完全に無視したことは、たしかにマルハルの最大の失策である。

#### 4.-3. アスペクトはふるまいの概念的余剰である

バズによれば、アスペクトを「見る」ことは、われわれが物を扱ったりみなしたりする仕方には還元不可能である。アスペクト視の特有性は、なにかを特定の仕方で扱ったり見なしたりすることからそれが概念的にはみ出してしまうということにあるからである。そしてまさにそこに、「アスペクト」について明確で整合的な見方を得ることの困難の根があるというのだ（cf. Baz (2010), 243-4）。たとえば次のワイトゲンシュタインの言葉は、まさにそれを表現しようとしているかのように読める。

「その場合きみは、ある時はこれのことを、またある時はこれのことを考えることができ、それをある時はこれと、またある時はこれと見なすことができる。そしてきみは次にはそれを、ある時はこのように、またある時はこのように見るであろう。」——いったいどうやって？ それ以上を規定することはできないのだ。(PU-II, 163)

あなたがなんらかのAspectを見ているということは、あなたの「ふるまいの微妙な綾」から読みとることができるかもしれない。しかし、あなたがどの——あるいは、どんな——Aspectを見ているかは、わたしにとっていつでも明らかだろうか。「いまは何が見える？」というわたしの問いに、あなたがただ「これが見える」としか答えようがないこともあるかもしれない。同じく、「さっきは何が見えていた？」というわたしの問いに、あなたはやはり「これがさっきはあれに見えた」としか答えようがないこともあるかもしれない。そしてバズのような見方をする者にとっては、この行き止まりこそがAspectのAspectたるゆえんなのである。

#### 4.-4. 見ることは持続性をもつ状態である

マルハルがAspect視と同一視している「扱う」や「みなす」は、時間的な始点と終点を特定できるような行為や出来事、あるいは状態のようなものではない。それは言ってみれば、世界への、あるいはすくなくとも自分のまわりの親密な世界——ハイデガーなら「環世界 (Umwelt)」と呼ぶであろうもの——への態度なのである。そして、Aspect視を時点や持続を問える行為や出来事や状態として考えるべきではないとするマルハルの息のながい議論は、上の 2.-1. で見たような『探究』第二部第 xi 章の議論だけではなく、

「ともかく、けっして理解を「心的過程」と考えてはならない！」(PU-I, 154) という『探究』のワイトゲンシュタインの勧告の理論的背景をも共有していると考えられる。その意味でマルハルの言う「アスペクト視」はたしかに、ハイデガーが「理解」ということで考えているもの——「いつからいつまで続いたのか?」、「始終そうなのか?」といった問いがそれについては意味をなさない技能知に類したもの——と一致する。なぜなら、『探究』のワイトゲンシュタインもやはり「verstehen」というドイツ語の日常的用法に依拠しているからである。

しかし、バズによれば、アスペクトを見ることであろうとなかろうと、そもそも「見る」は文法的に言って、「扱う」や「みなす」と違って持続性をもつ状態である<sup>(26)</sup> (cf. Baz (2010), 243–4)。このことはワイトゲンシュタインにとって自明なことであったと思われる。

わたしは本当にそのつど別のものを見ているのだろうか。それとも自分の見ているものをそのつど違う仕方解釈しているだけなのだろうか。わたしは前者のように言いたい気がする。しかしなぜか。——解釈は思考であり、行為であるが、見るというのは状態 (Zustand) だからである。(PU-II, 248)

見ることに於いて本質的なことは、それがひとつの<sup>・</sup>状態であり、またそうした状態は別の状態へと急変しようということである。(BPP-II, 43)

マルハルは、この「見る」の文法に対するワイトゲンシュタインの感受性を

完全に無視している。

#### 4.-5. 概念をあてがうこととしてのアスペクト視

いまの論点と密接に関連することだが、上の 4.-2. で引用した PU-II, 237 では、閃くアスペクトは「考察されている対象への特定のかかわりが続くあいだだけしか持続しない」と言われている。それに関連してバズは、BPP-I, 961 の「見られたものにある概念をあてがい (an das Gesehene einen Begriff heranbringen)、見られたものと一緒にその概念を見ている」という表現に着目する (cf. Baz (2000), 110)。

それはあたかもひとが、見られたものにある概念をあてがい、見られたものと一緒にその概念を見ているかのようである。なるほどその概念自体はほとんど見えないが、それにもかかわらず、さまざまな対象の上にそれらを秩序づけるベールを広げているのである。(BPP-I, 961)

あるアスペクトをわたしが記述する場合、その記述は図形それ自体の記述には含まれていない諸概念を前提としている。(BPP-I, 1030)

アスペクトが儂く、対象に一定の仕方にかかわっているあいだしか持続しないのは、アスペクト視においてわれわれは「いわば」対象に概念をあてがうことによって、そこにはないものをそこにあるものと一緒に見ているからであり、その意味でアスペクト視とはわれわれがやっていること、われわれが「専念する (sich beschäftigen)」(BPP-I, 1020) ものであり、それゆえある程度まで随意的であるからである。だからこそ、先に 4.-1. で確認したよう

に、フォークを指して「これをいまフォークと見よ」という命令は意味をなさないのである。

ひとが思考によってある相貌を現れさせることができるというのはきわめて重要なことである。(BPP-I, 1036)

アスペクトを見ることも、想像することも、意志の支配下にある。「これを想像せよ」という命令もあれば、「この図形をいまそう見よ」という命令もある。しかし「この葉をいま緑と見よ」という命令は存在しない。(PU-II, 256)

アスペクトが意志の支配下にあるということは、その本質に触れずらしいような事実だというわけではない。というのも、もしもわれわれが事物を随意に赤と見たり緑と見たりすることができたとしたらどうだろうか。そうなったらひとは「赤」や「緑」といった言葉の適用をどうやって学ぶのだろうか。なによりも、そうなれば「赤い対象」というものは存在せず、せいぜい、緑と見るよりも赤いと見るほうが容易な対象が存在するだけということになるであろう。(BPP-I, 976)

アスペクトを見ることと思考との類似性はどこにあるのか。アスペクト視には、知覚に伴うような結果がないということ、その点でアスペクト視は想像することに似ているということにある。(LW-I, 177)

「アスペクトの閃きはなかば視覚体験であり、なかば思考なのだ」(PU-II,

140) というウイトゲンシュタインの謎めいた言葉は、以上の脈絡で理解すべきものである。

#### 4.-6. 諸対象の内的連関を見ることとしてのアスペクト視

マルハルも着目しているとおおり、アスペクトは対象と対象との連関にかかわるものであり、アスペクト視においてわたしが見るのは「対象と他の対象とのあいだの内的関係」である。

対象の色には視覚印象における色が対応する（この吸い取り紙はわたしにはピンクに見える、そしてそれはピンクである）——対象の形には視覚印象における形が対応する（この吸い取り紙はわたしには長方形に見える、そしてそれは長方形である）——しかし、わたしがアスペクトの閃きにおいて知覚するものは、対象の性質ではない。それは対象と他の諸対象とのあいだの内的関係 [eine interne Relation] である。(PU-II, 247: 強調筆者)

言ってみれば、「記号をこの脈絡において見る」というのは思考の残響のようなのである。「見ることのうちに残響している思考」——こうひとは言うかもしれない。(PU-II, S. 212<sup>(27)</sup>)

もしあるアスペクトを見ることのある思考に対応しているとすれば、それはいくつもの思考からなる世界の中においてのみひとつのアスペクトでありうる。(BPP-I, 1029)

私はあるものをさまざまな異なる連関において見る。(これは見ることよりも想像することに近いのではないか。)(BPP-I, 960)

アスペクト視の第一の例がふたつの顔に類似性を見ることであったことを真剣にうけとるなら、アスペクト視においてわたしが見るものは他の対象との内的関係であるということは、マルハルにとってもっと別の意味をもっていたかもしれない。しかし彼はそれを、ハイデガーの日常的現存在の現象学と関連させることによって、適在全体性やさし向け連関や有意味性のネットワークという文脈で理解したのであった。だが、アスペクト視がそういうものであるのは、いまの引用文からも見てとれるとおり、アスペクト視が思考に、もっといえば想像に近いからである。そうだとすれば、アスペクト視はなおさら恒常的ではありえないであろう。恒常的に想像しているということは、心理学的(経験的)にも、概念的(文法的)にも理解不可能だからである。かくしてバズは、マルハルに次のように反論する。

アスペクトがしばらくのあいだわれわれのもとに留まるということはありうるが、しかし、われわれのもとに長いこと留まりながらも依然としてわれわれにとってひとつのアスペクトであり続けるということは、文法的にはありえないことである。これはアスペクトの(文法的)非自明性——わたしなら「新鮮さ」と言いたいところだが——と関係があり、この非自明性は、自明であるものを背景としてプレイされるものである。アスペクトのゲームは客観性のゲームを背景としてプレイされる。われわれは、現実にそこにある対象に、現実にそこにあるのではないものの概念をあてがうのである。(Baz (2000), 115)

#### 4.-7. 慢性的アスペクト視

やはり 2.-2 で見たように、マルハルは、ハイデガーの言う日常的平均的現存在の習慣化された円滑な「内世界的存在者との交渉」をモデルに、恒常的アスペクト知覚を考えている。ところが、以上六つの論点から明らかなのは、アスペクトは対象（典型的には道具）との習慣化され自動化された出会いのなかに取りこまれてしまうなら、もはやアスペクトではなくなるということである。事実、「慢性的」なアスペクト視（これがマルハルが「恒常的アスペクト知覚」という語で指そうとしていたものである）はもはや本来の意味ではアスペクト視ではないとウイトゲンシュタインが示唆しているように読める断章も存在する。

アスペクトが突然変化するとき、ひとは第二の様相を（「あれ、これは……だ！」という叫びに対応する）急性の症状として体験するが、そうした場合にはひとはたしかにそのアスペクトに専念している〔sich beschäftigen〕と言える。慢性的なものという意味でのアスペクトは、われわれが図形をくりかえし扱うその仕方のことを言うにすぎない。（BPP-I, 1022）

#### 5. アスペクト変換と驚き

ところが、第 xi 節に現れる用語の「正しい」解釈という観点からではなく、アスペクト視という「色とりどりの」現象（cf. BGM-III, 46, 48）を多面的に論じることでウイトゲンシュタインが何を示したかったのかという観点から見ると、マルハルとバズの距離は見かけほど遠くはないと思われてくる。



マルハルは、アスペクトの閃きを経験する能力が重要に見えるのは、それが諸事物と記号と人びとに対するわれわれの一般的な態度を露わにしてくれるからだと考える (cf. Mulhall (1990), 123)。それは、世界に対するわれわれの基本的関係が、問題のないもの、自明なもの、親密なものであるということ、したがって、世界を家としてそこに住まうとは、問題視しないのを学ぶこと、自明視するのを学ぶこと、親しくなることであるということ、明らかにしてくれるのである。

同じようにバズも、アスペクトの閃きは世界に対するわれわれの基本的関係がどのようなものであるかを露わにすると考えている。しかし彼はマルハルとは逆に、その関係とは、われわれが世界との親密性をたえず回復せねばならず、その親密性は自明視によってたえず失われる危険にさらされているというような、そんな関係である——ゆえにわれわれは「習慣的で便利なものの扱い方やみなし方に屈するならそれらのものを見る能力を失うことだろう」(Baz (2010), 248)——と考えている。

こうして、マルハルとバズの対立は、自明視すること(見ないこと)と自明視しないこと(見ること)のどちらがわれわれと世界との親密性の徴表なのかという問題に収斂する。実際のところ、ウィトゲンシュタインにとってアスペクト視は恒常的でありうるか否かという問題は、前節の最後で引用した BPP-I, 1022 の「すぎない (nur)」を重くとるかとならないかの違いにすぎないと考えることは可能である。事実、マルハルが「恒常的アスペクト視」と誤って呼んでいたものは、ウィトゲンシュタインが「慢性的なものという意味でのアスペクト」と呼んだものことなのである。しかも、2.4. から 2.6. にかけて見てきたように、みなし方やとりあつかい方としての「慢性的アスペクト視」の外的規準と考えるのが自然であるものを、ウィトゲンシュ

タインは熱心に蒐集しているのである。たとえば彼はPU-II, 199でこう言っている。

さてわたしが「われわれは肖像画を人間とみなす」と言うとき——われわれはいつ、またどれくらいのあいだ、そうするのか？ われわれがそれをそもそも見ているのなら（そしてそれをたとえば別のものとして見ていないのなら）、ずっとそうしているのか？

これを肯定してもよからうが、それによってわたしはこの〈みなす（Betrachten）〉という概念を規定することになる。——問題は、そのうえでなおわれわれにとって、それと類縁関係はあるがまた別の概念が、（すなわち）わたしが像に（描写されている当の）対象として専念しているあいだだけ成り立つような〈そう見る〔so-Sehen〕〉という概念が、重要になるのかどうかということである。（PU-II, 199）

ここでのウイトゲンシュタインは、マルハルがZuhandenheitとひとくくりで呼んでいるものやふるまいの微妙な綾などを外的規準とする慢性的アスペクト視を指すものとして「とみなす（Betachten-als）」という概念を拡張することを禁じてはいない。問題は、そのうえでバズが強調している「本来の」アスペクト視という概念（恒常的ではありえず、注目しているあいだしか続かない、脆い「そう見る（so-Sehen）」）が必要となるのかどうか、ということである。この点で両者は袂を分かつのであり、そしてこの点で、そのことに気づいていないように見えるマルハルよりも、当然それは必要だと考えるバズのほうが正しい、とわたしも考える。

しかし、そもそもバズの見解は、アスペクト変換が惹きおこす「驚き」に

ついでにウイトゲンシュタインの文章から彼が読み取ったものを考慮に入れないかぎり、不可解かもしれない。バズが注目するのは次の文章である。

線がグチャグチャに書かれている中にウサギアヒルの頭が隠れていると  
考えてみよ。さてある時わたしが、その絵の中にウサギアヒルの頭を、  
しかも単にウサギの頭として、認めるとする。その後、ある時わたしは、  
同じ絵を眺めていて同じ線に気づくのだが、しかし今度はそれをアヒル  
として認める。だがこの場合わたしはまだ、それが二回とも同じ線であ  
ったことを知っている必要はない。さらにその後でわたしが、今度はア  
スペクトが変換するのを見たとする——わたしはこう言えるだろうか。  
すなわち、その場合ウサギとアヒルの両アスペクトは、グチャグチャの  
線の中にわたしがそれらを別々に認識した場合とは、まったく違ったふ  
うに見られるのだと。いや、そうは言えない。

しかしアスペクトの変換は、別々に認識された場合には惹きおこされ  
なかつた驚きを、惹きおこすのである。(PU-II, 152: 強調筆者)

この星座が、わたしにとってはいつも変わりなくひとつの顔だと思われ  
るとしても、それによってわたしがなんらかのアスペクトを名指してい  
るわけではない。なぜなら、このことは、わたしがいつもその星座に顔  
として接すること、それを顔として扱うことを意味するにすぎないが、  
アスペクトの特異な点は、わたしがなにかを絵の中に入れて見ていると  
いう点にあるからである。つまりわたしは、全然そこにはないもの、図形  
のうちには書かれていないものを見ているのであり、したがって自分が  
それを見ることができるということは(すくなくとも後でそれについて

反省してみると) わたしを驚かせる、とひとは言うことができるであろう。(BPP-I, 1028: 強調筆者)

バズがここから読みとる、アスペクト視という現象を語るうえで欠かせない論点とは、脆く儚いアスペクトの閃きによって、わたしは、そこにはないのが「分かっている」ものを「見る」ことができる自分自身の能力に驚くのだ、ということである (cf. Baz (2000), 110)。残念ながらバズはここで筆を止めてしまっているため、ここからは解釈の問題である。まず彼は——先ほど指摘したとおり——まるでマルハルに引きずられるように、こう言っている。

アスペクトの閃きによって顕わになるかぎりでの、世界に対するわれわれの関係は、われわれが不断に世界との親密性——永遠に焦眉のものでありつづけ、自明視されたならかならずや失われるはずの親密性——を回復させねばならないような、そんな関係である、というものである。この不断の危険性は、言いかえるなら、習慣的で便利なものの扱い方やみなし方に屈するならわれわれはそれらのものを見る能力を失うことだろう、ということである。(Baz (2010), 248)

彼は「世界との親密性」ということで何を意味しているのだろうか。アスペクト視と思考や想像との家族的類似性を、そしてまたアスペクト視の(ある程度の)随意性を強調しているところから察するに、彼の言う親密性とは、わたしが世界を本当にわたしのものだと感じるときの親密性のことであろうと考えることができる。そしてこれが、マルハルとバズの真の対立点なので

ある。マルハルは逆に、われわれが日常的世界の中に——ハイデガー的に言うなら、どこにいるのでもなく誰でもなく〈ひと〉(das Man)として——埋没しているときの親密性のことを考えているからである。

いまの表現の仕方からも示唆されるとおり、わたしは、親密性についてのこのマルハルとバズの対立は、まさに前者が引き合いに出したハイデガーの議論の中で解消可能であると考えている。最後にそれを論じることにはしたい。

## 6. ハイデガーとアスペクト

『存在と時間』のハイデガーの「方法」を、ごく単純化して次のように特徴づけることができる。彼の師であったフッサールの現象学は、われわれが普段そのうちを生きている自然な自明性を人為的に括弧に入れることによって、その自明性を根底で超越論的に構成するなにものかへと迫ろうとした。これに対してハイデガーは、ふとしたときにわれわれを襲うアスペクト変換が、フッサールが現象学的還元という作為的な方法でもって追求していることをすでにわれわれに告げていると考える。マルハルとバズの読むワイトゲンシュタインが、アスペクトの閃きや変換というありふれた現象からわれわれと世界の関係についてある重要なことを読み取ろうとしているのと同じように、ハイデガーも、ハンマーのような道具が使えないことによって逆に目立ち、はては押しつけがましくなるというありふれた現象 (cf. SZ, 73) と、不安でなにも手につかなくなるという現象から、世界内存在という現存在の根本構制 (Grundverfassung) について、ある——彼の基礎存在論というプログラムにとって——重大なことを読み取ろうとする。前者の「世界性の閃き」と呼ばれる現象から彼が読み取ったのは、「世界がおのれを告げないと

いうことは、手許のもの (das Zuhandene) がその目立たなさのうちから踏み出さないことの可能性の条件である」(SZ, 75) ということである。これが、マルハルがワイトゲンシュタインのアスペクト論から学んだものである。自明なものとは、目立たないものであり、見慣れたもの、いわば見ないことをわれわれが学んだものである。このように「見ないこと」(「……とみなすこと」、慢性的アスペクト視) を学ぶことが、世界と親密になること、世界内存在に熟達することなのである。

ところがハイデガーは、世界性の分析の後に一転して、この親密さは「非本来的 (uneigentlich)」であると主張する。それが倫理的な意味で偽物であるとか間違っているとかわけではない。現存在の実存論的分析——実存の「意味」の解明——にとって、文字どおり、現存在に「固有の (eigen)」あり方に即した親密さではないということである。このことをわれわれに教えるのが、不安において世界の相貌が一変するという体験である。不安のなかで、日常的な配慮の相手であった親密な「世界は完全な無意味性という性格をもつ」(SZ, 186) ようになり、堅固な根底／根拠 (Grund) に見えていた日常世界が深淵／無底 (Abgrund) に変貌し、わが家のように親密であった世界が不気味さ (Unheimlichkeit) という相貌を帯びる。にもかかわらず、ある意味で世界にはなにも起こっていないことをわれわれは知っている<sup>(28)</sup>。だから〈ひと〉は、不安が去ったあとに「それはもともとなんでもなかった (nichts) のだ」とつぶやくのである。

バズがワイトゲンシュタインから読み取ったことをここにややねじったかたちで重ね合わせるならば、われわれはここで自分自身に驚く——「頹落 (Verfallen)」を、「自分自身を選択し掴みとる自由に向かつて自由であること」(SZ, 188) からの逃避を、日常的世界の平穏と満足に見せていた自分自

身に驚く——と言っていいだろう<sup>(29)</sup>。配慮された日常的世界との親密性は（あくまで実存論的分析という観点から見ればだが）おのれ固有の実存からの疎遠さを条件としている。これが、アスペクトの文法ということでバズがこだわっていたものである。ハイデガーが「頹落」と呼んだものによって可能となるアスペクト視というものはたしかにある。それがマルハルのこだわっていたものである。それは彼が誤って「恒常的アスペクト視」と呼び、ウイトゲンシュタインが「慢性的アスペクト視」と呼んだものである。これに対してバズは、この頹落の自明性を破るものこそアスペクト視の名にふさわしく、しかもその脆く儂い体験こそが、世界との親密性をわれわれに回復させてくれるものだと考えるのである。そしてこの点でバズの姿勢は、ハイデガーの『存在と時間』の方法論的意識と合致する。ハイデガーにとっては、『存在と時間』をつうじて実存の存在論的意味の解明に参画する読者は、このアスペクトの閃きが垣間見せるものを直視しつづけようとする者——無力にも投げられたまま存在し、かつ存在せねばならないという「被投性を、現存在が実存のうちへと引き受けざるをえない非力な根拠 (nichtiger Grund) として理解する」(SZ, 287) 者——でなければならない。なぜなら、ハイデガーによれば「実存」とは、「そのつどわたしのもの」(SZ, 41) だからである<sup>(30)</sup>。

そしてまさにこの点が、第 xi 章がウイトゲンシュタインの「方法」にとってもつアレゴリーとしての意味との接続点である。ウイトゲンシュタインは『探究』の第一部でこう書いている。

物事のアスペクトとしてわれわれにとってもっとも重要なアスペクトは、それらが単純であり日常的であることによって、むしろわれわれには隠されている。(ひとはそれに気づくことができない——なぜならひとは

それをいつも目の前で見ているから。) 人間には、自分の研究の本来の基礎はまったく目に付かないものである。もちろん、このことが一度でも目に付いたことがあるなら話しは別だが。——そしてこれが意味するのは、ひとたび目にされたならもっとも目に付きやすくももっとも強力であるはずのものがわれわれの目に付かない、ということである。(PU-I, 129)

さらに彼は、この文章に先立つことはるか以前、『論考』を準備中の1915年に、「軟らかいものから硬いものを分けるのではなく、軟らかいものの硬さを見てとるのが、わたしの方法である」(5月1日: NB, 44)と書き残している。それほど目に付きやすいものをわたしの目から隠せるのは、わたし自身をおいて他にはないはずである。わたし自身が、これほど軟らかいものがそれほどの剛性をもつはずがない、とわたしに思い込ませているのである。ウイトゲンシュタインの——そしてハイデガーの——「方法」は、本来もっとも目立つはずの aspekto を、あるいは、軟らかいものの硬さの aspekto (おのれの被投的事実性の根拠性) を隠しているのは、ほかならぬ自分自身であることをわれわれに気づかせるということにある。



〈ワイトゲンシュタイン著作略記〉

- BGM: *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik*. G.E.M. Anscombe, Rush Rhees, G.H. von Wright (hrsg.), Ludwig Wittgenstein Werkausgabe, Bd. 6, Suhrkamp, 1989.
- BPP (–I, –II): *Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie*. G.E.M. Anscombe und G.H. von Wright (hrsg.), Ludwig Wittgenstein Werkausgabe, Bd. 7, Suhrkamp, 1984, S. 7–346.
- LW–I: *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, vol. 1. The University of Chicago Press, 1982.
- NB: *Notebooks 1914–1916*, ed. by G.H. von Wright and G.E.M. Anscombe, transl. by G.E.M. Anscombe, Basil Blackwell, 1979.
- PU (–I, –II): *Philosophische Untersuchungen*, Revised 4th edition by P.M.S. Hacker and J. Schulte, Blackwell, 2009.
- T: *Tractatus logico-philosophicus*. Ludwig Wittgenstein Werkausgabe, Bd. 1, Suhrkamp, 1984, S. 7–85.

〈参考文献〉

- Aidun, D. (1982): “Wittgenstein, Philosophical Method and Aspect–Seeing” in *Philosophical Investigations* 5, 1982, pp.106–115.
- Baker, G. (2004): “The Grammar of Aspects and Aspects of Grammar” in his *Wittgenstein’s Method: Neglected Aspects*, Blackwell 2004, pp.279–293.
- Baz, A. (2000): “What’s the Point of Seeing Aspects?” in *Philosophical Investigations* 23, April 2000, pp.97–121.
- (2010): “On Learning from Wittgenstein, or What Does It Take to See the Grammar of Seeing Aspects?” in Day and Krebs (2010), pp.227–248.
- Bernet, R. (1994): “Phenomenological Reduction and the Double Life of the Subject” in Th. Kiesel and J. van Buren (eds.), *Reading Heidegger from the Start: Essays in His Earliest Thought*, State University of New York Press 1994, pp.245–267.
- Cavell, S. (1979): *The Claim of Reason. Wittgenstein, Skepticism, Morality, and*

- Tragedy*, Oxford University Press.
- Conant, J. and Diamond, C. (2004): “On Reading the *Tractatus* Resolutely: Reply to Meredith Williams and Peter Sullivan” in Max Kölbel and Bernhard Weiss (eds.), *The Lasting Significance of Wittgenstein’s Philosophy*, Routledge 2004, pp. 46–99.
- Day, W. (2010): “Wanting to Say Something. Aspect–Blindness and language” in Day and Krebs (2010), pp. 204–224.
- Day, W. & Krebs, V.J. eds. (2010): *Seeing Wittgenstein Anew*, Cambridge University Press.
- Genova, J. (1995): *Wittgenstein: A Way of Seeing*, Routledge.
- Good, J. (2006): *Wittgenstein and the Theory of Perception*, Continuum.
- Gould, T. (2010): “An Allegory of Affinities. On Seeing a World of Aspects in a Universe of Things” in Day and Krebs (2010), pp. 61–80.
- Jastrow, J. (1900): *Fact and Fable in Psychology*, Houghton Mifflin.
- Johnston, P. (1993): *Wittgenstein: Rethinking the Inner*, Routledge.
- Kremer, M. (2001): “The Purpose of Tractarian Nonsense” in *Nôus* 35, 2001, pp. 39–73.
- Malcolm, N. (1968): “Wittgenstein’s Philosophical Investigations”, in G. Pitcher (ed.) *Wittgenstein: The Philosophical Investigations*, Macmillan 1968, pp. 65–103.
- Mulhall, S. (1990): *On Being in the World: Wittgenstein and Heidegger on Seeing Aspects*, Routledge.
- (2001): *Inheritance and Originality*, Clarendon Press.
- (2010): “The Work of Wittgenstein’s Words. A Reply to Baz” in Day and Krebs (2010), pp. 249–267.
- Read, R. and Lavery, M.A. eds. (2011): *Beyond the Tractatus Wars: The New Wittgenstein Debate*, Routledge.
- 荒畑靖宏 (2001): 「還元と二つの主観性」, 『現象学年報』第 17 集, pp. 121–128.
- (2009): 『世界内存在の解釈学: ハイデガー「心の哲学」と「言語哲学」』, 春風社.
- (2012): 「自己知・アスペクト・遮蔽——ハイデッカーとウイトゲンシュタインにおける「霊性の構え」」(ハイデッカー研究会編, 『科学と技術への問い——ハイデッカー研究会第三論集』, 理想社, 2012 年, pp. 199–216.

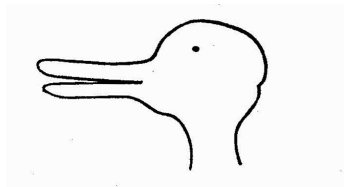
Verdi, J. (2010): *Fat Wednesday: Wittgenstein on Aspects*, Paul Dry Books.

註

- (1) 本稿は、2012年10月20日に日本大学文理学部で開催された人文科学研究  
所哲学第2回ワークショップ「ワイトゲンシュタインの哲学をめぐって」で  
の研究発表（「アスペクトの脆さ：ワイトゲンシュタインとハイデガー」）を  
元に執筆されたものである。発表の席上で貴重なご意見・ご質問を賜った方々  
に感謝申し上げる。
- (2) Cf. Read and Lavery (2011).
- (3) Cf. Conant and Diamond (2004); Kremer (2001).
- (4) ほんの一部であるが、本稿で中心的に扱われる Baz (2000), (2010); Mulhall  
(1990), (2010)を除けば、わたしが目を通したかぎりでは、Genova (1995);  
Baker (2004); Good (2006); Day and Krebs (2010); Verdi (2010) などが  
ある。
- (5) 2009年に出版された『探究』最新版（第四版：Ludwig Wittgenstein,  
*Philosophische Untersuchungen/Philosophical Investigations*, transl. by  
G.E.M. Anscombe, P.M.S. Hacker and Joachim Schulte, revised fourth  
edition by P.M.S. Hacker and Joachim Schulte, Wiley-Blackwell, 2009）  
の改編者であるハッカーとヨアヒム・シュルテは、第二部についての周知の  
アンスコム証言と推測には懐疑的で、第二部を『探究』の一部とは認め  
ず、「Philosophie der Psychologie—Ein Fragment [previously known as  
'Part II']」という名の下に同書に収録している。経緯の詳細については同書  
pp.xx–xxiiiを参照せよ。本稿では、『探究』第二部（PU-II）からの引用はこ  
の新版のナンバリングに準拠する。
- (6) これについては荒畑（2012）で論じた。Baker (2004)やAidun (1982)もア  
スペクト論に関して基本的に似たような解釈をとっていると思われるが、当  
のアレゴリカルな連関は『探究』だけに限定されている。
- (7) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen: Niemeyer, <sup>18</sup>2001 (<sup>1</sup>1927). 以  
下、同書からの引用の出典は略記SZならびに頁数を本文中に記す。
- (8) これらの概念については、以下の2.–3.を参照せよ。

- (9) Cf. PU-II, 118, 140, 207, 209, 237, 247.
- (10) Cf. PU-II, 135, 257.
- (11) Cf. PU-II, 257-8, 260-1.
- (12) Cf. PU-II, 118, 166.
- (13) Cf. PU-II, 116-8, 120-22, 137, 162-3, 166, 176-8, 185-6, 189, 196, 203, 205-6, 208, 219, 222, 249, 254, 257-8.
- (14) Cf. PU-II, 123, 197, 199.
- (15) これに関してはJohnston (1993)も同意見である。「アスペクトの閃きの重要性は、それが恒常的アスペクト知覚というより広い現象に注意を向けさせることにある。」(*ibid.*, 43)
- (16) 正確には、このネットワークは世界そのものというよりは、ハイデガーが「環世界 (Umwelt)」と呼ぶものの構造のことであり、したがってそれは「世界性 (Weltlichkeit)」と呼ばれる。以上の諸概念の連関に関しては、荒畑 (2009), 16-22 を参照されたい。
- (17) 「道具連関は、いまだかつて見てとられたことのない全体としてではなく、目配り [Umsicht] のうちで不断にはじめからすでに観取されていた全体として、閃いてくる [aufleuchten]。だが、こうした全体とともに世界がおのれを告げるのである。」(SZ, 195)
- (18) 最後の論点は、つねにその無動機性を批判されていたフッサールの「現象学的還元」のハイデガーによる読み替えであるとわたしは解釈している。わたしの見るところでは、現象学的還元という方法的操作は、徹底性を愛する哲学者の自由な決断としてのみ遂行されうると考えていたフッサールに対して、ハイデガーは、現存在の日常性のうちですでに「現象学的還元」に相当する現象はたえず起っている（しかもそれはほかならぬ日常的現存在が本質的に引き裂かれた二重性をもつことに起因している）のであって、むしろ、そこに哲学的な意義を認めない態度こそが問題であると考えていたのである。さらに言えば、フッサールの還元が形相的還元と現象学的-超越論的還元という二段階構造になっているのと類比的に（だがけっして対応して、ではない）、ハイデガーの「還元」も二段階構造をなしている。第一段階は、いま触れた、阻害状況での世界の世界性の閃きであり、第二段階は、(後に述べる)不安の中で世界の有意味性が沈没するという現象である。詳細については荒畑 (2001) を参照されたい。類似の議論としてはBernet (1994) をも参照せよ。

- (19) Cf. PU-II, 261 : 「この〔アスペクト盲という〕概念の重要性は、「アスペクトを見る」という概念と「語の意味を体験する」という概念の連関にある。なぜならわれわれは、「ある語の意味を体験しない者にはなにが欠けているのか?」と問いたいからである。(✓) たとえば、「sondern」という語を発話し、かつそれを動詞として意味せよ、という要求を理解しない者には——あるいは、「sondern」という語は、十回続けて発せられると、自分にとってその意味を失って単なる音になってしまう、と感じない者には——なにが欠けているのであろうか?」; BPP-I, 175 : 「[その言葉を聞いたとき、それはわたしにとって……を意味していた]と言うひとは、ある時点と、その言葉のある用法とにかかわっている。——ここで注目すべきなのは、もちろんその時点との関係である。(✓)「意味盲人」[der 'Bedeutungsblinde']とは、その関係を喪失している人であらう。」
- (20) PU-I, 118 で紹介されている、ジャストロウの次の二重アスペクト像のことである (cf. Jastrow (1900), pp.292-5)。J・ヴァーディによれば、オリジナルはドイツのユーモア雑誌 *Fliegende Blätter* の 1892 年 10 月 23 日号 (S. 147) に掲載されたものであるらしい (cf. Verdi (2010), pp. 2-3)。



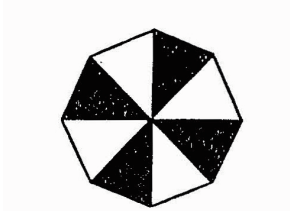
(図 3)

- (21) 彼自身はもっと慎重に (曖昧に?), 恒常的アスペクト視は、アスペクトの閃きという特殊な経験と、「知っている」という名称のもとに総括される知覚の解釈モデルないし推論モデルとのあいだの、概念的余白ないしカテゴリーを埋めるものである、という言い方をしている。Cf. Mulhall (1990), 19.
- (22) Cf. PU-I, 182, 190, 238-239, 253, 258, 269, 288, 290, 322, 344, 354, 376-377, 385, 404, 509, 542, 572-573, 580, 625, 633, 692; PU-II, 36, 60, 146, 180, 242, 318-320.

- (23) 詳細については荒畑 (2009) の第二章を参照されたい。
- (24) このように言うことは、「規準」概念をめぐる N・マルコム の解釈とカヴェルの解釈の対立が決着済みだと断ずるのでないかぎり、軽率に思われるかもしれない。カヴェルは、Cavell (1979) で、他者の心の懐疑論に対するウイトゲンシュタインの「規準」概念の関係性をめぐって、マルコム の「標準的」解釈に反対している。マルコムによれば、ウイトゲンシュタインの言う「規準」は「徴候」とは違って「構成的」である。つまり、「しかじかが  $y$  の規準であるということは、経験の問題ではなくて「定義」の問題である。(……)  $y$  の規準が満たされたことによって、 $y$  の存在が疑問の余地なく (beyond question) 確認されたことになる。」(Malcolm (1968), 84) したがって、ある心的状態の存在の規準とされるふるまいがある人に見られるなら、その人がその心的状態にあることは「疑問の余地なく確認された」ことになる。よって、ここに懐疑をさしはさむ者は、定義の問題である規準を経験の問題である徴候と混同していることになる。これに対して、マルコム のこの解釈は規準概念に訴えるウイトゲンシュタインの真意を逸している、とカヴェルは主張する。カヴェルによれば、ウイトゲンシュタインの真意は懐疑論の哲学的論駁にあるのではなく、むしろいかなる疑いも排除されているような状況を特定するのは不可能だということがわれわれの日常言語の宿命であり、日常言語は本質的な不確実性に憑かれているのだということを示すことにある。他者の懐疑論についてカヴェルがウイトゲンシュタインから学んだことはこう要約できよう。「懐疑論への応答は、懐疑論の真実を最初から排除してはならない。そしてその真実は、われわれはその他者が人間であるのかどうか疑っているという命題にあるのではない。懐疑論の真実はむしろ、他者の人間性——他者の感覚、感情、知覚、盲目性——に対するわれわれの関係は知識の問題ではない(……)ということに」(Gould (2010), 77)、むしろ承認と拒絶の問題であるということにあるのだと (cf. PU-I, 281, PU-II, 22)。たしかに、規準が定義の問題にすぎず、規準の問題には懐疑論のつけない隙はないというマルコム の解釈には問題がある。とはいえ、認識論的な脈絡とは別のところであら——懐疑論は認識論に寄生するものである——、つまり「構成」が懐疑論への応答にならないような脈絡でなら、 $y$  の規準の充足が  $y$  の存在を「構成する」という考えをウイトゲンシュタインに帰することはあながち間違いではないとわたしは考えている。本文で以下に挙げている箇所

などはその証拠になると思われる。

- (25) PU-I, 213 で挙げられている次の図のことである。



(図 4)

- (26) その意味で、本来ならばこの「Sehen」は「見えている」と訳すべきかもしれない。この指摘に関しては飯田隆氏に感謝申し上げる。
- (27) この節は PU 第 4 版ではなぜか削除されている。
- (28) ハイデガーはそれを、不安の対象 (Wovor) と不安の理由 (Worum) が同一であるため、つまり現存在は世界内存在 (被投的な世界内存在) のゆゑに世界内存在 (世界内存在可能) を不安がるという再帰的構造のためであるとする。Cf. SZ, 186f.
- (29) Cf. SZ, 189: 「公共性の居心地のよさ (Zuhause) の内へと頹落しつつ逃避することは、居心地の悪さ (Unzuhause) からの、すなわち、自分の存在において自分自身に委ねられている被投的世界内存在としての現存在のうちにひそむ不気味さ (Unheimlichkeit) からの逃避である。このような不気味さはたえず現存在を追跡し、たとえ表立ってではないにせよ、〈ひと〉の中に日常的に喪失してしまっている現存在を脅かす。」
- (30) 以上の論点の詳細については、荒畑 (2012) 第 5 節を参照されたい。